

100年後、どんな社会で暮らしたいか

9月14日(日)、15日(月・祝)、在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク「第14回全国の集い in 京都 2008」が同志社大学(京都市上京区)において開催され、2日間で1360名の参加者を数えた。

メインテーマは「伝統の京都で100年後の暮らしを考える」。そこで1日目の記念講演、記念シンポジウムは「家族」をテーマに行なわれた。その一方、「地域連携と活動」「その人らしく暮らすために」「在宅緩和ケア」「在宅における医療とケアの連携」「最後まで安心できる暮らしを支える心構え」「ケアする側のケア」のカテゴリに分かれ、教育セミナーも開講。「認知症医療ケアの新時代」では来年度大会長を務める大澤誠氏(医療法人あづま会理事長)が認知症の原因疾患ごとのBPSD(認知症の行動および心理症状)への対応を解説し、生活モデルのみならず医療モデルの視点によるケアの重要性を発表した。

続いて実践交流会が同じく6つのテーマ別に開催された。これは会長の黒岩卓夫氏(医療法人萌気会理事長)、大会長の永原宏道氏(医療法人永原診療会理事長)が「実践交流の初心に帰る」と語った今大会における目玉の1つともいえるもの。会場ごとにベテラン、若手が入り混じる実践発表が行なわれ、新たな関心、流れを呼び起こしたように感じられた。

2日目もカテゴリごとに分かれて講演、シンポジウ



「BPSDの治療とケア」について発表する大澤氏

ムが開催された。「在宅における医療とケアの連携」では、関透氏(下京西部医師会会長)らが認知症を地域のネットワークで支えることの重要性を解説。また、精神科医・神経内科医・脳外科医・放射線技師・ソーシャルワーカーからなるもの忘れ外来を開設した内海久美子氏(市立砂川病院精神神経科部長)は、認知症医療の課題として地域全体での情報共有を挙げた。

総括プログラムにて大会副会長の渡辺康介氏(医療法人社団都会理事長)が「在宅医療を提供できる医師・ケアスタッフが不足し、後期高齢者の問題もあるなか、ますますネットワークの役割が増すだろう」と語り、大澤氏が来年への意気込みを述べ終了を迎えた。次回大会は2009年9月20日(日)、21日(月・祝)に群馬県民会館(前橋市日吉町)ほかで開催される予定。